

Poems dedicated to Muses

ギリシャ神話の女神たち「ムーサの歌」

ムーサの歌 その1

美しいムーサたち

花の姉妹—エオスとセレーネ—

奔放な愛に生き
誰にも傳（かしづ）かない
赤いひまわりのような
妹だった

静かな愛に生き
誰にも思われる
白い月見草のような
姉だった

妹は男との恋に破れ
美しい男を求めていた
高価な車で連れ去り
自分のものとした

彼の不死を願った妹も
彼の不老を願わなかつた
すっかり年老いてきた恋人
すると部屋へ閉じ込めた

繰言をつぶやくばかり
泣言を叫ぶばかり
懺悔を絞るばかり
するといつしか蝉となつた

それが最初の男だった

夜明けになると
美しい男を誘いにいく妹
ばら色の爪は
いつも整えられていた

まるで暁の女神のように
サフラン色のガウンに
光と輝きをまとっていた
そして逞しい男をみつけた

狩りの得意な男だった
腕のなかで妹はうつとりとした

愛におごった彼は別の女に挑み
その女が放った蠍の毒で死んだ

それが二番目の男だった

情熱の衰えない妹は
新婚の床から男を奪い去る
彼は八年間離れていても
妻を慕い続ける男だった

これが三番目の男だった

静かな月見草の姉は
たったひとり美少年を愛した
その少年は愛に満たされて
毎日男らしくなっていく

妹の願いはただひとつ
このまま変わらずにいてほしい
この美しさを この寝顔が
わたしのものである限り

不老不死の願いは
聞き届けられた
それは生を止めること
丘のうえで永眠させること

姉は月の女神のように
日が暮れて、朝が来るまで
ずっとその寝顔を見て
優しく額を撫でるのだった

それは最初で最後の男だった

赤いひまわりの妹
白い月見草の姉
ふたりの愛の激しさと優しさは
恋人たちを凌駕したのだった

星の乙女——アストライア——

神々が地上にあり
人々と交わった
黄金の時代

ひとりの女神が
正義を説いた
人々は耳を傾けた

時代が移り
人々が貪欲になった
銀の時代

神々は地上を去り
天に帰っていった
そのときも

女神は最後まで
地上に残り
人々に訴えた

時代がなおも移り
人々が残酷になった
青銅の時代

女神は絶望し
心ある人々を残して
天に帰っていった

星の乙女は
空から鉄の時代を
見下ろしている

正義の天秤は
二つの皿で
量るものなのに

「いったい
幾つの正義が
あればいいの

もう人々が
好きなように
解決すれば？」

星の乙女は
哀れみの眼差しで
見下ろしている

ムーサの歌

大地ゼウスを父にもち
ムネモシュネーを母とする
九人のムーサは女神です

美声という名の
カリオペー
それは叙事詩の女神です
不老不死の神なれば
筆の勢い留まらず
英雄作り続けます

贊美という名の
クレイオは
それは歴史の女神です
不老不死の神なれば
巻物継いで物語り
今日の事も綴ります

歓喜という名の
エウテルペー
それは抒情詩の女神です
不老不死の神なれば
心から的好き詩には
絆（ほだ）されては泣いてます

豊満という名の
タレイアは
それは悲劇の女神です
不老不死の神なれば
時には無理にカタストロフィ
仕立てて劇を盛り上げます

歌手という名の
メルポメネー
それは挽歌の女神です
不老不死の神なれば
哀しい歌を選んでは
きれいな声で歌います

舞踏という名の
テルプシコラー
それは合唱の女神です
不老不死の神なれば
みな声そろえ和声つけ
神々 賛美いたします

美女という名の
エラトーは
それは独唱の女神です
不老不死の神なれば
ばら色の微笑みいつまでも
衰える事ありません

贊歌という名の
ポルムニア
それは贊美の女神です
不老不死の神なれば
人の善意や善行は
褒めてほうびを与えます

天女という名の
ウーラニア
それは天文の女神です
不老不死の神なれば
コンパスもって天の上
あなたの位置を知らせます

九人のムーサが
揃うとき
それはそれば見事です

天変地異のなきように
いましばらくは
ムーサ達の平安を

大理石のお姿に
祈りを捧げる
わたしです

怒りの女神—エリス—

怒りは
激情の裏返し
女神とて例外ではない

誇りを捨てて傳いて
真実を尽くした後に
裏切られた女神
その名はエリス

軍神を父にもち
夜の女神を母とする
血にまみれた鎧着て
真っ赤な炎の息を吐く

エリスの怒りは
世界を覆すように
からだは震え
声は一段高くなる

深紅のくちびるは
血の気をうしない
涼しいまなこは
血の気を帯びる

全ての神が
招かれる祝宴で
そこに呼ばれない
怒りが沸騰点に達する

なぜなら不和厳禁の
婚儀であったから
エリスは投付けたのは
「黄金の林檎」ひとつ

「もっとも美しい
女神にあげるわ」
かくて三女神の
争い生じて・・・

ヘーラー
アフロディティ
アテネー
それぞれが美を競う

判定を任された
羊飼いパリスの
懊惱はげしい
「パリスの審判」

かくて
それがもとで
トロイア戦争の
幕が切って落とされる

エリスは
三人息子を産み
それはポノス 労苦の神
レーテー 忘却の神、アルゴス 悲嘆の神

エリスは
ひとり娘を産み
それはそれで
混沌の女神にする

いま幸せな人々
いま平和な国々
少し慎んでいたほうが
この母娘の怒りは買わない

海の女神—アンピトリテ—

高々と
天に捧ぐ
血色の枝珊瑚
海の秘密を
開ける鍵

ポセイドンは
大地神
その誇りもて
冷たい女神を
諦めず追う

男神の怒りは
大地を震わせる
大神殿も崩し
海も割れるほど

地の果て
アトラスまで逃げる
女神を追いかけて
どこまでも探し出す

隠れ場所は
イルカが教えた
怖さと熱意に
女神は愛を受ける

ポセイドンが
欲したのは
海の優しさ
その深さ

ポセイドンが
愛したのは
白い砂を敷詰めた
エーゲ海の青の色

柔らかい藻は

揺れて眠る海
愛しき魚が
群れて遊ぶ海

アンピトリテに
美しい海を
すべて任せたい
安らぎを守りたい、と

かくて
ポセイドンと
アンピトリテは
息子トリトーンをもうけ・・・

いまも
荒れ狂う嵐も
青黒い瞳が
少し目配せすれば
風いでくるという

カリテスの歌—美女の命—

カリスの女神は
あくまで明るい
始めのうちは
なにもかも
明るい

すべての者達は
愛することで
子を為して
その姿は
「花」

花盛りと呼ぶ
タレイアは
みるみる
衰えて
嘆く
「時」

喜びと呼ぶ
エウプロシュネー
恋の花が
今実る
「結」

輝く女と呼ぶ
アグライア
恋の凱歌は
高々と
「天」

美女と呼ばれる
カレーの女神
老いても
なおも
美女
「優」

成長させる女
アウクソ
美の面を
剥いで
なお
「生」

カリテスの女神
美女の一生に
寄り添いつ
髪を梳り
囁くは
呪文
「命」

運命の輪—テュケー—

テュケーの冠は
都市の城壁
あらゆる災いから
守りぬく女神

洪水も地震も
嵐も風雪も
人々の騒乱も
文化の破壊も

女神は退ける
都市に静穏を
秩序を、豊穣を
もたらすために

羊の角に
収穫物を
詰めての捧げ物
祈りは喜びの歌

女神とて
運命の輪は
動かさなければ
ならない

できるなら
正しい方向へ
明るい処へ
良き様に

女神の目は
不遜な人々の
わずかな不正も
見逃さない

美しい眼差しは
貧しい人々の
慎ましい暮らしに
注がれる

きょうも市街は
女神に守られ
静かに眠りに
落ちていく

美しき砲撃—現代のアマゾネス

女神アルテミスを
奉じた部族は
すべて女だった

男は他部族
強い遺伝子を求め
孕んで戻った

弓を引くため
きりとった
ひだりの乳房

生まれてくる
女児だけを
厳しく鍛えた

アマゾン川まで
追われても
意気は盛んだった

いま、
自由を求める
女が戦う時代

血は争えず
強い女の詩人
ここに集まれり

美しく静かに
打ちのめす
言葉の一撃

ネメシスー復讐の女神

その翼で
どこまでも
追いかけて
復讐を遂げた

その愛を
踏みにじった者へ
その愛を
己へ向けた者へ

ネメシスに
なかつたのは
容赦という
美しい徳

容れることは
己を無にすること
赦すことは
己を殺すこと

天に刃向う
驕った人間は
誰だ
どこだ

怒りの鋳鉄を
熔かしつづける
女神の眼に
炎が立ちのぼる

アテーナーの島

どの街も
完全なる自治を行い
互いを侵犯しない

どの街も
言論を戦わせ
暴力で屈服させない

どの街も
どこの力にも
決して屈服しない

そうして
商いの流通と
繁盛が約束された

旅人は
地料理と地酒を
振舞われた

内圧を高め
外圧に負けない
島の知恵

美しい守護神
アテーナーは
微笑んで見守っていた

アンドロメダー

エチオピア王の
王妃カシオペー
その娘アンドロメダー

母が神々より美しい、と
口にしたばかりに
怒りを買い捉えられた

岩に鎖で
くくりつけられ
苦しむ女神

たまたま通った
ペルセウスが
助けて救われた

天上の星に召され
いまでも星雲が
輝いている

ヘカテー

新月を守護する女神
闇にあっても
迷う人々を導く

月満ちて
月欠ける
その廻りにあって

女性は
あくまでも
守られねばならない

ヘカテーの
三面の顔に
迷いはない

ホーライ

タローは春の女神
アウクソーは夏の女神
カルポーは冬の女神

種を蒔き
生長し
実る

命の糧を
つかさどる
三姉妹—ホーライ

メリッサ

マケドニア
スコピエから
オフリドまでの道

土地の人が
道端で蜂蜜を
売っていた

車を止めて
色々尋ねる
詩友たち

今だから
この光景が
輝いて想い出せる

道端の花も
群がる蜂も
蜂蜜も——

何千年と
いのちを繋いで
生きている

蜂蜜の女神
メリッサが
守っているから

運命の三姉妹 モイライ

運命には
逆らってはいけない
川を遡り泳ぐこととなる

しかし
斜めに泳ぐことは
できるかもしれない

力を抜けば負けるし
力が尽きれば溺れる
時間は決められている

目的地は
定まっているか
どの灯かりを目指すのか

暗い川を
渡っていくのに
道連れはいるのか

運命の糸を操る
三姉妹すらも
その不安を顔に出す

ただ
女神の歌をたよりに
その方向へ泳げばいい

レー

ガイアを母に
クレタ島で
ゼウスを生んだ
強い女神

夫クロノスから
子供を守り
育てあげた
気丈な女神

獅子を
脇にはべらせ
椅子にゆったりと
座っている

戦費を
土地に注げば
豊穣を
約束する女神

黒衣の女神 レートー

黒衣をまとう
優しい女神
その子供達は違う

うずらに変身した
ゼウスと交わり
子を生む

そのため
ほかの女神に
嫉妬をされてしまう

出産場所を
与えない策略に
苦しみアルテミスを生む

姉アルテミスに
手を引かれ
彷徨ったあげく
弟アポロンを生む

9日9晩の
難産に堪え
多くの女神たちに
見守られ無事に生む

空には
白鳥が舞った
という

水中のムーサたち

香油壺

マケドニア遺跡から出土した香油壺のレプリカがここにある。ストルーガ詩祭で記念に頂いたものだ。そういえば、その地の土産品は、なぜか蝶の意匠が多かった。どこへいっても蝶の形の民芸品が売ってある。レースであったり、金色に光っていたり、ネックレスになっていたり。それも遺跡から出土したという由来をもつと、後で知った。

神殿

文明の発祥は、神々を出現させた。治める最高権威にある人物を褒めるのも断罪するのも神であり、その前では王もひとりの人間であった。下々はさらに弱く、日々の糧すら神のご加護を祈った。神々は陽気だった。力は絶大で、空を統べ、海を統べ、地を統べた。神々を鎮め、安らいでいただきための神殿は、なにより大切だった。土地を見下ろす高台に建てられた。

水中の女神たち

近年急速に発達した水中考古学という学問がある。海底探査機器の発達により、見つけられた水中遺跡には、息を呑むような光景があった。ある女神の背中は白蝶のように滑らかで、ひざを抱えている。ある像は、藻がメデューサの蛇のようにからみあい、壮絶な表情を見せている。人の手に触れなかつた幸運があった。宗教戦争の憎悪から、鼻をくじかれた聖像が多いなかで、それらの顔は、一点の欠けもなく、美しく水中に時を遊んでいたようだ。

水中の獅子

アレクサンドリアの水中遺跡で発見された、獅子の像は、いかにも生きているようだ。いや、筋肉の割れまで透ける精悍な雄の気高さ、ああなんと雄雄しい姿であることが。百獣の王は、海の底で二千年も没しながら、威厳を失わずにいたことに言葉を失う。神々を守る使命は立派に果たしている。

